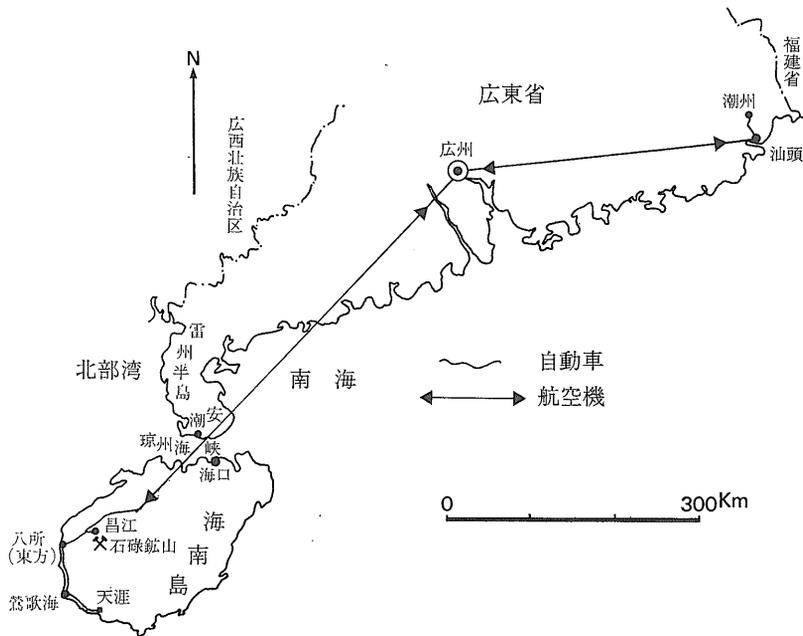


中国再訪(1)

小村 幸二郎 (鮎床部)
Kohjiroh KOMURA



まえがき

中国をはじめて訪ずれたのは 夏の盛りであった。空港ビルに入ると どっしりとしたその外観に似ず木製のベンチが整然と並べてある内部は 全く殺風景であった。片隅にある小さな売店では外貨で土産品を買うことはできなかった。大都会とは思えないほど暗い北京の夜 広い天安門通りをゆく自転車群 紺色か緑色のズボンに白い半袖シャツ 西単の壁新聞 「工業を大慶に学び 農業を大業に学ぶ」のスローガン 人口の多い割にはきわめて少ない乗用車などなど 慌しかった旅の途中で見たものが鮮やかによみがえってくる。

それから丁度5年 思いがけなく再び中国を訪ずれる機会を得た。新聞やテレビなどでは 「中国の変貌ぶりはすごい」といったことが報道されているが この5年間に 一体 中国はどのように変わったのだろうか。再度の訪問が決ってから出発するまではきわめて短時間であったが その変りようを想う時間は 出発の時が近づくとつれて次第に多くなっていった。

午前6時すぎ 7月とはいえ空港への道はまだ陽射しが弱く 行き交う自動車も少ない。朝早い出発は旅行者にとっては決して好ましいことではないが 北京で出迎えてくれる人達のことを思うと ごく当り前のことだ。クーラーのよくきいた車の中で 5年前に逢った通訳のT嬢と海南島の林純琮夫人のことを想い浮べていた。リンゴのようなほっぺでいかにも元気そうなT嬢 海口から石碌鉱山までのバスの中で 涼し気な声で歌ってくれた色白の林さん この2人に逢えることも期待して機上の人となったものの 北京空港でTさんの死という悲しい報せが待ちうけていようとは 夢にも思わなかった。中国再訪の第一歩でうけた心の痛みは 旅が終わってからも容易には消えなかった。過ぎ去ったことにこだわってはいけないと分ってはいても 「中国のために 当分の間は結婚せずに 仕事に全力をつくす」と語ったT嬢の生々とした顔が浮んでくる。死だけが悲しいできごとではない 喜怒哀楽は人の世の常だ とはいっても のの 久しぶりに逢えることを楽しみにして来た身には やはり 大きなショックであった。

北京で

前回訪ずれた時にあったベージュ色の空港ビルは完全に姿を消し そこには白くてガラス窓の多い近代的なビルが建っていた。広々としたロビー 多くのカウンター 2階には広々としたレストランがあり 待合室には外貨を使える免税店がずらりと並んでいる。托送荷物を受取る場所は広々としており 以前の建物にくらべると規模もはるかに大きく 将に首都の玄関にふさわしい空港ビルである。

空港には北京駐在のKさん 有色金属工業総会社の鈴木さん 日本語通訳の閻欣恵さんと英語通訳の郭美芬さんが出迎えてくれた。閻さんは天津から来てくれた日本語の通訳 郭さんは重慶から来てくれた英語の通訳である。この2人の女性は全く対象的で 閻さんは白の半袖ブラウスにグレイのズボン 郭さんは白のスーツにサングラス そして白のハイヒールに白の帽子という モード雑誌から抜け出てきたような服装であった。20日間ばかりの旅行に2人の女性が一緒に行動してくれれば30才台の女性と20才台の女性の処世心の違いがうかがえるかもしれないと期待していたが 残念ながら郭さんは一緒に旅行しないことになっていた。

空港から北京市内への道路には 相変わらず 揚柳の並木が光っていた。以前とあまり変わっていないと思ううち林立する高層ビルが目についた。建築中のものもあるそのビルの群は 住宅団地らしい。近代的に生れ変わった空港ビル 全く予想もしなかった高層住宅の群を見るうちに わずか5年という歳月が途方もなく長かったように思えてきた。市街地へ近づくにつれて 以前は数少なかった乗用車が多くなってゆく。そしてバスの乗客も 自転車を走らせる人も 歩いている人も服装が実にカラフルになっているの気がついた。罽広のサマーハットにサングラス スカート丈の短かめの白いサマースーツに白のハイヒール そして ショルダーバックで颯爽と歩くお嬢さん 真紅のワンピースの奥さんも通ればホットパンツの娘さんも行く 色鮮やかなものといえば真紅のスカーフや軍人の帽章・襟章ぐら이었다以前にくらべれば 服装の変りようは大変なものだ。しかし 変貌著るしい現在の中国では この程度の変りようは驚くにあたらないのかもしれない。

北京滞在中の宿は燕京飯店であった。このホテルも5年前にはなかったが この他にも最高級の長城飯店をはじめ 幾つかの新しいホテルが開業していた。また新しく開業した日本食堂もあればウエスタンスタイルの食堂もあり おまけに世界に名だたるMという高級レストランもできていた。中国料理は世界一うまいといわ

れているが 食物の本場に 何故 異国の高級レストランが急速にふえていけるのだろうか。

暑い盛り 仕事の合間に友誼商店と東方書店を訪ずれてみた。友誼商店を訪ずれたのは土産品を見るためではなく 北京に長期滞在する人にとってどのような食品等が手に入るかを知るためであり 東方書店を訪ずれた主な目的は これから旅しようとする地方の省別地図を購入することであった。

友誼商店の内部は 一見 全く変わっていないように思えたが 実は著るしく変わっている所があった。以前は中国旅行でウイスキーやブランデーを買って帰る人は 成田空港の免税売場で買って それを中国旅行の間持ち歩くか知人に預け 帰国する時に持ち帰るという面倒さを我慢したものだが 今は友誼商店にはいろいろのウイスキーなどがずらりと並び また 一流ホテルの売店でも上等の酒が自由に買える。友誼商店の酒売場には日本製の酒もあり 煙草売場ではマイルドセブンなどが日本で買うよりも安く買える。だが 流通機構や冷凍設備などはまだ十分ではないらしく 外国人専用の友誼商店で売っている生魚の鮮度は 海からそう遠くはない北京にしては今一つという感じである。

東方書店の内部は 出版物の種類が多くなったのか 以前とは少し変わっていた。地図売場でお目当の省別地図があるかどうか聞いてみると 残念ながら1枚もないということだった。出版されていることは確かだから印刷数が需要に及ばないのか または 改訂版でも出版するので在庫がないのかもしれない。しかし 前回ここを訪ずれた時には斑岩銅鉱床の本だけしかなかった地学関係の図書売場には タングステン クロム 斑岩銅鉱床 西藏の地質など多くの論文集が並んでいたし 中国語辞典類も種類が多くなっていて、科学技術の向上を「四つの現代化」の一つの柱とするこの国の意欲の表われが こうした書物の出版からもうかがえるように思える。

超一流とみなされているレストランで外国の高級料理や酒を賞味することや 外国のファッションを自分のものにする事や 生活を便利にする物や いろいろの面で中国の中味はいわゆる先進諸国に近づいているが (だからといって すべての物を自力で作れるこの国が真の発展途上国であるとは思えない) まだまだ 不便なことがある。外国人がガソリンを購入できる店は人口750万人のこの大都会に2軒しかないことや 「中国民航」に行かなければ航空券の予約や購入ができないことなどはその例である。ただひたすらにその時を待つことは 何事にもくじげずに前進するための力を蓄えるということでは必

要なかもしれないが 目まぐるしいほどの世相の流れの中で息している人にとっては 我慢できないことであるかもしれない。未知への憧憬 未知との遭遇 そして新しい発見を期待する旅人にとっては 旅そのものに時間をかけるのは喜びの一つであろうが その旅をするための手続きに神経と肉体とをすりへらすようなことは好ましいことではない。

小雨の降る早朝 雨宿りをすすめてくれた愛想の良い主人が居た西瓜屋は健在であった。しかし その近くにあった壁新聞は全く姿を消していた。壁新聞は 庶民の意志を伝える一つの良い場であったのだろうが 完全に姿を消してからもう4年以上になるらしい。

いかに夏の盛りとはいえ 陽が沈むとかなり涼しくなる。夜の北京は乗用車が著るしく多くなったせい以前よりは賑やかに思える。クーラーの良くきいたタクシーの窓越しにネオンサインが見えた。これも一つの発見である。昼間訪問した役所で「長城その他見学したい所があればアレンジしますが 希望がありますか」と聞かれた。見学したい所は数えきれないほどあるが「とくにありません」と丁重に断った。何日間も北京に滞在するのであれば 適当な所を見学する気にもなろうが あまりゆとりのないこの滞在では 見学に時間をつぶすよりは これから長期間にわたって北京に滞在する人の生活に必要な物を売っている店や品物の種類などを調べたり 地図や資料などの入手のために時間を使う方がよい。こうしたことや関係機関の人達との打ち合わせなどで 北京滞在の2日間はすぎた。

広 州 へ

午前6時 室温は25°Cである。白粥の朝食をすませ ゆっくりと身仕度をして空港へ向った。陽射しはかなり強い。午後1時すこし前に北京空港に着き 2階のレストランで昼食をとることになった。しかし およそ1時間待ってみたが 結局 従業員は注文とりにこず昼食を口にすることはできなかった。以前の建物や設備とは全く比較にならないほど近代化された空港ビルの長い廊下を歩いて出発待合室に辿りついた。機内で食事のサービスがあるとも思えず 待合室の片隅の売店で買ったクッキーとコーラで空腹を満たした。朝食を十分すぎるほど食べたはずなのに この時刻には もう 胃袋は完全に空の状態になっていた。それが水気の多い粥のせいか 日頃 朝食に好んで肉を食べる習慣のせいさだかではない。ともあれ クッキーとコーラで一息ついた。

広州行の飛行機は満席であった。機内に入って待つ

ことおよそ30分後の3時5分過ぎに ジェット機はよおら飛び発った。待合室でクッキーとコーラを買う前は 昼食の時刻をとくに過ぎてから飛び立つこの飛行機では 食物らしいものの機内サービスはないだろうというのが皆んなの一致した予想だった。しかし この予想は完全にはずれて コーヒー クッキー サンドウィッチ アイスクリューム そしてキーホルダーが次々に配られた。こうなるとう出発直前に胃袋に入ったクッキーとコーラがうらめしくさえ思えてくる。我慢ついでにもう少し我慢すればよかったと悔んでも 既に 後の祭りで 日中合作の予想は不成功に終わった。クッキーとコーラで満腹になっていたはずなのに機内でサービスされた食べ物は どこに納まったのか隣席の人よりはかなり早く姿を消した。

北京を出発してから2時間30分 広州に到着した。地上の気温は34°Cで北京の気温よりは10°C近くも高くまた 湿度も高い。亜熱帯圏内に位置している広州の表情は 内陸盆地に位置する北京の表情とはかなり異なっている。その基本的なものは 気候・風土や生活環境などの差異なのであろうが また それぞれが迎った歴史の流れが大きく影響していることも否めないだろう。

空港から市街への道路も風景も5年前と殆んど変わっていない。だが 市街地へ入ると5年前とは違ったものが目につくようになった。市の中心部や珠江の畔りに建っている巨大なホテルは 5年前にはなかったしホテルの近くの路上でレイチを商う者も以前は殆んどいなかった。人々の歩く速さも 心なしか 以前よりは速くなったように思えてくる。恐らく 5年という短かい時の流れの中で 広州は商業都市としての地位をますます高め 活動が活発となり 訪ずれる人も著るしく増え 広く海外へ門戸を開く大都会として充実しつつあるのだろう。

東方賓館のフロントは 多勢の宿泊客でごったがえしている。前回訪ずれた時にくらべると フロントも広くなり 内部に軒を連ねる多くの店もきれいになり そして 高級品店がふえたように思える。色鮮やかなビーチパラソルと簡易ベッドが並ぶプールサイドに憩う外国人の姿は 土地の庶民には 一体 どのようにうつるのだろうか。

6時30分 部屋に荷物をおいて10分後には全員が集り翌日からの日程について話し合った。万事が現地任せでなければ事が運びにくいことが分りきっているだけに 切角作成されたスケジュールを 特に変更することもない。航空券が入手でき 全員が確認したそのスケジュー

ール通りに無事に調査旅行ができることを願うだけだが一抹の不安は拭いきれない。北京を出発する以前に海南島では約2,000人が広州行の飛行機を待っているという話を聞かされた。丁度夏休みの時期でこの島へ遊びに行く人が多い割には航空機の運行回数が少なくまた使用機が小さいということはあるがそれにしても2,000人が飛行機を待っているという話を聞くと時期が時期だけに大雨か台風で欠航が続いているのではないかと思えてくる。何とかしてスケジュール通りに行動したいものだが最悪の場合は広州から約600kmの雷州半島南端の海安までバスこれから海南島北端の海口までフェリーで行くしかない。だがこの場合は予定より数日は遅くなり何かと面倒である。

予定通りに行動できるか否かそれはいつ確定するのか落着かない気持ちで東方賓館のレストランへ入ったのんびりとした旅であれば長い歴史に培われた味をもつ友誼飯店(以前は伴溪飯店と呼ばれていた)で美味しい料理や菓子を賞味するところだが妙に気ぜわしいこの夜はどこへも行く気になれない。東方賓館の広々としたレストランは空席が殆んど目につかないほど混んでいた。観光客が多いらしく賑やかなテーブルが多いようだ。特に食べたいものもなくごくありふれた料理をつづいているうちに1時間が過ぎた。9時過ぎ雨上がりの町へ出てみた。ホテルの周辺は結構人通りがあるが5分ばかり歩くと人影はまばらになり何となく暗く水溜りにうつる街燈の光りが侘しく思えてきた。大都会の夜には違いないが多くの国の大都会の夜とは全く異って弦歌さんざめくといったことはなく健全この上なく自戒心の乏しい人間には精神修養の場のように思えるかもしれない。

時計の針はとっくに12時を廻っている。車の音もとだえがちな夜更けの窓をいつ降りだしたのか小雨が故国に想を馳せる旅人の心情を察するかのように一すじ二すじ流れてゆく。

古都潮州

どんよりと曇った広州の夜が明けた。白粥と牛乳と春巻の朝食を終えてホテル内の本屋に立ち寄り広東省の道路地図を購入した。前回ここを訪ずれた時には見当たらなかったのが最近出版されたのかも知れない。価格は1枚約44円であった。

国内線を利用する客の受け付けカウンターは空港ビルに向って右手のこじんまりした建物の中にある。平屋建でややうす暗いこの建物の中は旅行者でかなり混雑している。約450円の空港利用税を支払って塔乗手続

きを終えた。だが塔乗口は正面のビルにある。塔乗手続をする建物と塔乗口のある建物が全くちがうのは漢字になじみのうすい人にとっては不便ではなからうか。

以前は待合室に入るまでは大して時間がかからなかったが今回は待合室への通路は特に長蛇の列である。パスポートと塔乗券の検査には大した時間はかからないはずだと思いながら少しずつ前進した。間もなく長蛇の列ができていく理由が手荷物検査にあることが判った。数個所で検査されていればこれほど待たされることはないだろうが何しろ検査は1個所で行われ金属探知器のブザーがなれば全部の品物がチェックされるので行列はなかなか進まない。自分の順番がきて小さなショルダーバックを検査台に乗せた。そして金属探知器のブザーが威勢よくなった。カメラ以外には金属製品は入っていなかったが結局バックの中の品物は全部検査された。もっともこういう検査は徹底的に実施した方がよい。検査を終えてきちんとファスナーをしめてくれた若い検査官は美事な日本語で「有り難うございました お元気で」と挨拶してくれた。その一言で待たされている間のささやかならちは消えた。どんな場合にも相手の立場にたって接することは大切なことらしい。

48人乗の双発機には空席はなかった。広州から広東省北端の汕頭(Shan tow, Sawo tow)まではおよそ55分間の飛行である。飛び発って間もなく機内サービスがはじまった。例によって緑茶とキャンディが配られこれで終わり勝手に決めこんだために揃いキホルダー 扇子 アイスクリームが配られた。広東省も黄楊の産地だとは知っていたが国際線の夜行便ならともかくわずか1時間ばかりの日中の飛行で揃いサービスしてくれるとは全く予想もしなかった。ビニール



写真1 広州空港の国内線塔乗手続をする建家本館に向かって右側にある

の袋に入ったその籐を見ているうちに ふと 通勤の途中で見た雑誌に「セットした髪が乱れるのを気にする若い男が多い」といった意味の記事が載っていたのを想い出した。 そのような若者は 身動きできないほど混んだ電車の中で 扇風機の風を恨めしく思いながら我慢しているのだろうか。

雲の切れめから見える地上は 緑におおわれ ゆるく波うっている。 民家はまばらで 実にゆったりとした風景である。 後部座席にいる老婆が 肩を軽く叩いた。 振返ってみると 先程配られたアイスクリームを差し出している。 もしかしたら冷たい物を好きではないのかもしれないが それならば隣席の人にあげればよい。 数えきれないほどの皺が深く刻みこまれた陽焼けした顔に いっぱいの笑を浮かべながら 溶けかかったアイスクリームをくれようとする老婆を見た瞬間 既に幽界に去った母の姿を想い出した。 若い時代には言葉では表わせないような苦労を重ねたにちがいないその老婆は 食べたいのを我慢して 異国の私に食べさせてあげようとしているのではなからうかと思い 有難くそのアイスクリームを頂戴した。

12時50分 汕頭に到着した。 こじんまりとした空港ビルの正面に見える「汕頭」の文字の燃えるような色が強烈に目にしみる。 気温は32°C 湿度は広州よりもやや高いような感じである。 北京を出発する直前に背広などは預け 必要最小限度の荷物だけを持参していたので 大きなスーツケースを持ち歩くことはないが 「落下傘と同じ布地で作ってあるから軽くて丈夫です」という店員の言葉を信じて買ったバックは どうしたことか 底に大きな裂け目ができていた。 恐らく 機内の荷物入れの中で偶然にそうなったのだろう。 人為的なものではないことと 日本で買った物であることで

内心 ほっとした。

汕頭空港から目的地まではおよそ45kmの道程である。 出迎えのマイクロバスに揺られながら 田園地帯をつききる狭い舗装道路を西北へ向かう。 広大な田園地帯に点在する一かたまりづつの農家 農作物を豊かに実らせる源となっている韓江の流れは信じられないほど静かである。 道路傍には 所々に 食堂 西瓜屋 ジュースを商う店などがあるが 客らしい姿は見当たらない。 恐らく 暑さを避けて食後の午睡をむさぼっている人が多いのだろう。 1時15分に汕頭空港を出発してからおよそ40分の後 左手に 工場らしい建物が見えてきた。 広州で買った地図によれば 楓溪というところらしい。

中国を旅行していると 美しい名の町や山をみかけることが意外に多い。 この楓溪もそうだ。 恐らく 秋になると背後の山の斜面が 美事な紅葉におおわれるのだろうが それにもまして この楓溪は 広東省では仏山の石湾と並んで二大陶磁器の産地として名高い所である。 中国の要人が訪日した折 お土産として持参した巨大な そして 見事な壺はここで製作されたものである。

舗装道路が通じていると聞いて 汕頭から目的地までは 40分もあれば十分だろうと想定していたが 狭い道路をトラックやバスが走っている上に 農産物や薬などを満載した農耕用の車がのんびりと走るので 予想以上に時間がかかる。 自動車と人の数が次第に多くなって間もなく 目的の潮州市に到着した。 汕頭空港を出発してから1時間5分も走ってきたというのに 潮州市の標高は100mほどである。

市の中心に建つホテル「潮州大厦」は 立派な外観をしているが あてがわれた6階のスイートルームは決して快適ではなかった。 部屋は広く 応接セットや茶器などはぬかりなく整ってはいるものの たった一つしか



写真2 潮州市の中心にあるホテル「潮州大厦」



写真3 潮州大厦のレストラン（中央八角形の部分）

ないクーラーは音だけは並以上だが余りの広さにさっぱり涼しくはない。まして奥まった所にあるベッドルームには窓がなく じっとしていてもとめどなく汗が吹き出してくる。しかし たとえどんなにむし暑くてもクーラーのない狭い部屋で 根気よく働いている人はきわめて多いはずである。そうした人達のことを思えばむしろ 暑いといっはクーラーの力を借り 寒いといっは電気やガスの暖房器にすがりがちな自分のひ弱さを反省すべきかもしれない。

潮州は旧名を潮安といい 古代には都として栄えたといわれている。楓溪で製作されている美術工芸品はおよそ800年前の宗の時代からの歴史をもっていると伝えられているが この長い歴史の中で 作品はどのように変っていったのだろうか。陶磁器原料がどこで採掘されているか質問してみた。山腹が抉られている所は見当らないが 原料は潮州郊外の飛天燕というところで採掘されているらしい。汕頭から潮州までの間には鉱山が近くにあることを想わせるものはない。しかし 中国の鉱床の形成に著しく貢献している燕山期の花崗岩類が広く分布しているこの地域には タングステンや鉛・亜鉛の鉱床をはじめ 一般に「玉」と呼ばれる貴石にいたるまで多種多様の鉱床があるらしく また 地質鉱産部の調査隊によって 新鉱床の発見のための調査も進められているらしい。最高点でさえ海拔およそ200m 比高100m 前後のこの付近で鉱床が発見されれば インフラストラクチャーに要する金額は少なからうし また 汕頭までの鉱石運搬費も大したことはなさそうだし 開発も比較的容易かもしれない。

昼食後の一番暑い時を見計って表通りを歩いてみた。人通りは殆んどなく 強い陽射しに焼かれる低い屋根や壁のうなり声が聞こえそうなほど静かである。後から後から吹き出してくる汗を拭うのも億劫になるほど歩いてみた。時折 開いている店を覗いて売っている品物の種類や値段や産地などを見る。犬も歩かないような暑さの中を全くご苦労なことだが 長い間の習慣で 今更やめられそうにない。何故そういうことに執着していたことをするようになったかははっきりしないが 過去を振り返ってみると 或る国に滞在していた時 某国のタバコが全く売られていない町なのに 或る日を境にして タバコをはじめ多種多様の品物が大量に売られるようになったことに対して疑問をもってかららしい。大量のそうした品物が売られるようになって間もなく それらの生産国との間の人や物の交流が著しく活発になったことを知って 一般に店頭で売られている品物の種類やその産地を知ることは その国の政治的・経済的指向

性を最も簡便に推測する方法の一つであると勝手に思いこんだことが 暑かろうが寒かろうが 暇をみつけては商店を覗く習慣をうえつけたらしい。もっとも これほど大げさでなくても どの町でどのような品物がどのような値段で買えるか また 手に入らない品物は何かなどを知ることは いくつか誰かが その町で生活するかまたは 或期間にわたって仕事をする場合に 役に立つことが多いことは確かである。或る商店で見たごくふつうの扇風機には154元(約16,900円) 自転車には179.6元(約19,800円)の値札がついていた。暑い最中にはクーラーのない家では せめて扇風機ぐらいは欲しいだろうに 2カ月分の月給を投資しなければ買えないとあつては 強烈なむし暑さに唯々ひたすら耐えるしかない。恵まれすぎた環境で生活できるがために不平不満を言い 美食が過ぎて太りすぎを気にし そして 高い金を支払ってやせる努力をしている輩とは違って 耐えることを余儀なくされている人達は 殆んど例外なく たくましい。「科学の進歩とはものをより複雑化することである」といった意味の記事を読んだことがあるが より精密にしてより複雑化することによって 反面 より弱い面を強いられることもあるのではなからうか。原始社会に生きた人々が画いたきわめて単調な絵を激賞する人もいれば 複雑で全く意味のないような絵に最高の讃辞を送る人もいる。全く世の中は多様なだけに面白いのだろうが 猿だか鶏だかが 足の裏に絵具をつけられ 真白いキャンパスを歩き回ってできた模様を見て 高名な美術家が「これを画いた画家は素晴らしい」と言ったという話もあるそうだから 案外 訳の分らないほど複雑なものを見せられると 全く判断できないため これは素晴らしいとつい口をすべらせることがあるのかもしれない。

潮州の古い家並の一角に開眼寺という大きな寺がある。唐時代の開眼26年に建立されたというこの寺には 多勢の参詣者が居たが 欧米人の姿は見当たらない。一時期 この国では 宗教活動は殆んど行われていなかったということだが この素晴らしい寺と ここに詣でて両手を合せる多勢の人達を見ていると 三大宗教の一つである仏教の復活めいたものが強く感じられる。美しい屋根と庭園 多くの彫刻 50kg以上の金が使われている仏像 重さ1tの隕石で作られた台座その他 建立当時から伝わる様々な物が 殆んど損われずに残されている。現在の潮州の状況からは予想もできないほど立派で大きなこの寺は 遠い昔には都にふさわしく一きわ壮大であつたらうし 今は数少なくなっているであろう古い都の面影を伝える最高のものかもしれない。だが 長い間 都として栄えたこの町で育かれた人達の心や作法など



写真4 潮州市の旧市街にある開眼寺の屋根

はどうだろうか。残念ながら 中国語にうとい筆者には ここの人達と他所の人達とをいろいろの面で比較できるほどの器量はないし またそうしたことをじっくりと見つめる時間もない。

三疊紀の堆積岩層中に形成されている鉱脈を見た最後の夜 汕頭市の中心地からやや離れた静かな環境に建つ龍湖賓館に泊ることになった。このホテルは汕頭市では最も新しい最高級のホテルである。外観はとくに目立つほどではないが 内部は素晴らしい。潮州市では折角あてがわれた上等の部屋ではあったが 部屋が広い上にクーラーが殆んど役に立たなかったため 余りのむし暑さに クーラーの風がまともに当たるソファの上に寝たが これにくらべると 龍湖賓館は将に天国を想わせる快適なホテルである。ふかふかのジュータンを敷きつめた広々とした部屋には上等のソファが並び 机も照明器具も茶器なども立派である。大きなドアで境されたベッドルームは 落ち着いたベージュ色で統一されたリビングルームとは違って 真紅の花柄のベッドカバーなどかなりはなやかである。大きなバスタブで 久しぶりに手足を伸ばした。ほどよく冷えている部屋にくつろいでいる折 「これこそホテルだ」と思った瞬間 屋間の労働で疲れ果てているであろう身体を休めるには 余りにも狭く そして 強烈にむし暑い部屋の中で寝苦しい夜を重ねているであろう人々の姿を想い浮べて 申し訳けない気がした。

経済特区に指定されて商業活動が活発化している汕頭には 汕頭市旅游産品生産供給公司 (Swatow Tour Product Supplying Company) というデパートのような建物がある。ここでは楓溪産の陶磁器 刺しゅう 玉や金属や木を素材とした彫刻品など 多種多様の物が販売されている。この付近の人は6才頃から刺しゅうを習う

らしく 販売されているテーブルクロスやベッドカバーなどの刺しゅう製品はほとんど手作りらしい。ここで販売されている物と同様の物はシンガポールを主とする東南アジア各国へ輸出され その年間輸出額はおよそ1,200万元(約13.2億円)ということである。

日没近く強烈な雷雨があった。全く身動きできないほどの雨脚とすさまじい雷 いわゆる熱帯のスコールに雷を加えたような光景の中をゆうゆうと歩いている人もいる。この強い雨を見つめながら 「予定通りに広州へ戻れるか」と不安がよぎった。そしてこの夜 中国の人達との食事の折 「明日は広州へ戻りますが 今日の雨は別れをおしむ皆さんの涙ではないでしょうか。日本では別れの直前に降る雨を“やらずの雨”と言います」と一言ししゃべったところ 拍手喝采であった。

広州へ戻る日の朝は快晴であった。6時に起きて慌ただしく朝食をすませ 龍湖賓館を出発した。空港まで自動車でおよそ30分である。出勤時刻にしては少し遅いようにも思えるが 市の中心部は自動車と自転車の群でもものすごく混んでいる。郊外へ出たとたんに 実にゆったりとした いかにも中国の田園地帯らしい風景に変わった。小物を積んだ手押しの一輪車の横を遠慮深げに小型の農耕機が通り過ぎてゆく。一輪車を押しているのは年輪の深くきざみこまれた陽焼けした顔の老人 農耕機を運転しているのは色白の青年であった。小川に遊んでいる家鴨は餌をとるのに忙がしいのか だみ声は全く聞こえない。庭先では 丸々と太った大きな豚と鶏が 仲良く遊んでいる。のんびりとした風景にみとれているうちに空港に到着した。こじんまりとした空港とはいえ 塔乗手続をするカウンター付近は混んでいるはずだが どうしたことか 客らしい人は少ない。昨夜の不安が甦った。そして 昨夜の豪雨のため広州



写真5 汕頭市で最高級のホテル 龍湖賓館

行の飛行機は飛ばず 今朝の1番機には昨日乗れなかった客が乗るため われわれは乗せてもらえないことになった。何も無い空港に居てもしかたがない。午後3時に出るという次の広州行の便を龍湖賓館で待つことにして空港を後にした。だが 3時の飛行機に確実に乗れるかどうかは分らないし また 雨のためにこの便が欠航になる可能性もある。3時の出発予定が4時過ぎになるという連絡が入り 不安は一層つまった。今日中に広州へ着けなければ今後の日程が狂うことはもちろん そのために必要な手続をするのが大変である。いろいろと考えた末 最悪の場合は広州行の夜行バスを利用することになった。汕頭から広州まではバスでおおよそ10時間 広州着は午前5時頃ということであった。

このバスが予定通りに広州に着いたとしても どこかで仮眠するゆとりはなく 直ちに広州空港へ行かなければ海南島行の飛行機の出発に間にあわない。まして 海南島行の便がうまくとれなければ バスとフェリーを使って またまた 長旅をしなければならぬ。最高級のホテルの素晴らしい部屋に居ることも半ば忘れて 何度も何度もメモ帳に今後の行程を書いてみては消した。

3時少し前に空港に行ってみた。塔乗手続をするカウンターへの入口のシャッターは ぴったりと閉ざされていたが 5分ばかり後にはあけられた。果して うまく座席が確保できるかどうか 相変らず胸はざわめいていた。それから30分ばかりの後 切符と荷物を預ってくれていた現地の人達が 待合室に入ってきた。皆が笑顔なのをみるとうまいことらしい。

3時頃には出発する予定だった飛行機は 結局 5時過ぎに出発することになった。待合室の片隅にある無料の熱いお茶で喉をうるおし 無料の小冊子を手にして 荷物の検査を受け 出発待合室に入った。そして 先程手にした小冊子が日本語で書かれていることに気がついた。うっかりしていたといえばそれまでだが もしかしたら 外国人を全くみかけないこの町で 日本語の印刷物があるわけがないという潜在意識があったのかもしれない。気づばりの足りなさを自分に恥じた一幕である。

快晴だった空は いつの間にか厚い雲におおわれていた。汕頭港は手にとるようによく見えはするが とても写真に撮れるほどの明るさではない。そして間もなく 雲の切れ間はなくなった。6時過ぎに到着した広州には 雨が降っていた。旅客は出迎えの人と一緒に足早に立ち去って行った。だが いつまで待っても汕頭で確かに預けた荷物は出てこなかった。広州から潮州まで同行してくれた人も 北京から共に旅している

人も 心配して待ってくれはしたが 結局 荷物を受取ることではできなかった。その荷物には 下着をはじめ身廻品や鉱石試料などが入っている。規律正しい国だから紛失することはないと確信しながらも 明朝早く出発することになっていることを思うと もし 最終便にも積載されなかったらどうしたらよいか 広州から潮州へ出発する以前から頭をもたげた心配は 最後の最後までつきまとった。日頃 清く正しく生きているつもり筆者にとってみれば 神様のいたずらも少し度がすぎているように思える。後で荷物が着いたらホテルへ届けてもらうことにして 重い足どりで空港を後にした。

出迎えのマイクロバスに揺られて東方賓館へ向う途中 ずぶぬれになりながら自転車をご多勢の人とすれちがった。亜熱帯圏にある広州ではスコールに近いような雨が降るのになれているのか 自転車に乗っている人も歩いている人も特に慌てている様子もない。

7時過ぎ 東方賓館の部屋に到着した。ゆっくりと風呂に入る時間はない。熱いシャワーで汗と汚れを流してさっぱりとしたものの 着換えは全くない。たっぷりと汗を吸いこんだ下着やズボンが湯上りに着るのは全く嫌なものだが 今は それしか着るものがない。汗臭いシャツを着て 食事のために外へ出た。珠江の畔りに建つ白亜の白鳥飯店には 日本からの観光客が多勢泊っているらしい。着飾ったご婦人や紳士 格好よさを地でいっているような若者 その中にあって 汗臭い作業服まがいの衣服を身につけて作業靴をはいている老人の姿は白鳥の群の中をとぼとぼと歩く黒い家鴨のようなものだ。だが 薄汚い姿はしていても 心の中は着飾って濁歩する連中よりは汚れていないつもりだ。珠江の流れに突出した円形の食堂は 決して広くはないが中々立派である。薄汚い姿でこんなに立派な食堂で食事できるのは 食魔とか大食漢とかひやかされることの多い自分にとっては大変嬉しいことには違いないが やはり 広東料理を賞味する同席の人達にとっては迷惑な存在であろう。

食べることにかけては他の追従を許さないとさえいわれている広州には 全く考えも及ばないような料理がある。今夜の食事に出された蛇のスープは お代りするほど美味しかったが 恐らく 蛇嫌いの人でもその材料が何であるかを知らなければ その自身をせせと口に運ぶことだろう。仔豚の丸焼かこのスープのどちらかを選べといわれたら 一寸味みした後ならば スープを選ぶ人が多いかもしれない。

夜も更けてホテルへ帰って間もなく 荷物が届き それまで胸の奥につかえていたものが一気に下りたような気分になり 今度は本格的に風呂に入った。そして

石けんの香りの残る下着を身につけた時 ようやく一日が終わったと思った。午前零時半 この夜も窓ガラスを一すじ二すじの雨が流れている。二度立寄った広州ではあったが 空港とホテルの間を往復しただけで5年前にくらべて何がどのように変わったかを知るゆとりはなかった。海南島行の航空機の予約はうまくいったらしい。広州を出発してから帰ってきた日の夜更けまで続いていた心配事は これで一応消えたことになる。

海南島石碌鉱山へ

早く起きなければならぬと思いながらベッドに横たわったせいか 4時半に目がさめた。6時にホテルを出発する予定だからこれでも早すぎるということはない。身仕度をしてロビーにおいてみたが 6時ではまだ静まり返っている。6時15分に空港に着き 6時半に塔乗手続きをすませた。出発は7時半だから 7時までには朝食をすませればよい。手続を終えてすぐ 近くの食堂に入ったまではよかったが さあ食べようという頃になって100名ばかりの日本人団体客が入ってきた。みればその半数は小学生らしく 残りは付添いの父兄らしい。どうみても親の旅行に子供がついて来たという感じではない。多分 夏休を利用して桂林あたりの見物へ行くお金持の家庭の人達なのだろう。騒々しく食事を始めたその団体客の中には 偏食者か食わず嫌いがかなりいるらしく 夜中に起きてその朝食を作ってくれた人の努力に感謝する気持は一かけらもなく 大きな声で折角運ばれてきた料理に大きな声でケチをつける人も一人や二人ではなかった。何事も経験そして勉強になることを念頭においての旅行であれば どんな時でも積極的に一口づつだけでも食べてみようと思うものだが どうやらこの人達は お金と暇があるがために見物旅行をしているようにみえる。恐らく こうした旅行者は美しく雄大な景色と素晴らしいレストランで食べた料理の美味さだけを想い出として大切にすることも、折角の旅行だから 旅先で見たり聞いたりしたことやその基盤になっている気候風土や歴史の流れに棹さしてきた人々の習慣などに目を向けたならば より実りのある旅になるのではなかろうか。

白粥とマントウと3品ばかりのオカズの朝食を慌だしく終えて 出発検査を終え 丁度7時に待合室に入った。広州から海南島の玄関に当たる海口まで667kmの間には船便があるということだが 何時間ぐらいかかるのだろうか。

5年前に海南島を訪れた時に乗った飛行機はかなり年

をとっていたように見えたが 今日の飛行機は これにくらべればはるかに若々しく見える。定刻を5分ばかり遅れて広州を出発した飛行機は 雨上りの快晴の空を南西へ向って飛ぶ。打続く丘のうねりと著るしく蛇行する川 そして 点在する不規則な形の湖 眼下に展開する田園のたたずまいは 将に 一幅の絵のようである。奇形をなす山の連なりとその間を流れる清流がおりなす自然は実に美しく 人間の力の到底及びそうもない偉大な力で押し迫ってくる。それだけに そのような自然美には 人間の息づかいは殆んど感じられないことが多い。だが 今眼下に広がる光景は 山水画に画かれているような起伏に富んだ美しさをもってはいないが 遠い昔からそこに生きてきた人々の生活の香りと息づかに満ち溢れた美しさを保っているように見える。緑の大地を飛び越えて大海原に出た。左手に細長く見えるのは海陵島だろう。真青の南海に白波は見えず 貨物船らしい大型の船の航跡がやけに白く見える。広州から海口までは525kmである。南海上空を経て琼州海峡を飛び越えれば 海南島最大の海口市である。右手に雷州半島 左手に海南島が見え 間もなく着陸態勢に入るベルト着用のアナウンスがあるものと思っていたが 一向にアナウンスはない。そして 飛行機は琼州海峡の上空を西へ向かって飛んでいる。海口市をとくに通り過ぎてはいるはずなのに どこまで飛んでゆくのか 当方にはさっぱり分らない。間もなく ベルト着用のサインがでた。海南島には海口市だけに空港があると思っていたら 他にもあるらしい。雨上りの深い緑は一きわ美しく その緑を切るオレンジ色の道路は実に鮮やかである。亜熱帯圏に位置する海南島は自然の恵に溢れているということだが 山も岡も見えない大平原の緑野は 比較的容易に 滑走路に化するだろう。広州を出発してから1時間25分後に着陸した飛行場には 旅客機らしい姿は見えなかったし 空港ビルらしい建物も見当たらない。迎えのバスに乗り 数分後におろされた場所の地名を見て はじめて その飛行場が海口市のはるか西方に位置していることを知った。その場所をここに明記することは いろいろと都合があって 遠慮した方がよさそうである。

多くの出迎えの人の中に はじめてこの島を訪ずれた時に逢った女性が居た。なかなか魅力的なその女性は林純琮さんといい これから訪ずれようとする石碌鉱山の招待所に勤務している人である。前回訪ずれた時にも海口空港まで出迎えてくれた人で 海口から石碌鉱山へ向かうバスの中で 実に涼しげな声で歌を口ずさんでいた。色白でふくよかな顔は以前とあまり変ってはいないが 真白のブラウスと濃紺のスラックスの清楚な姿

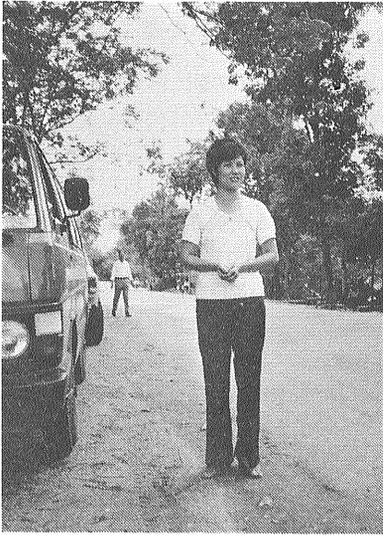


写真6 海南島石碌鉱山招待所の責任者 林純琮さん

は少し細くなったように見える。はじめて逢った時に比べると何となく貫禄めいたものが感じられまたその動作もきびきびとしているように思えた。

今も招待所に勤務していることは確かだが一体どういう理由で貫禄めいたものが身についたのだろうか。通訳の閻さんに「林さんはどこに勤務しているのか」聞いてみた。閻さんからは「林さんは招待所の責任者です」という返事がかえってきた。あれからもう5年やはり5年という歳月の中で林さんは多勢の従業員の頂点に立って一まわり大きく成長したのだろう。

空港を出発して50分ばかり走り熱帯植物研究所の入口で小休止した。林さんは出迎えのため鉱山を出発する際飲料やパンをもってきてくれたらしい。正午前には鉱山へ到着できることは確かなのにこうしたことにも気配りしてくれる優しさが招待所の責任者としてふさわしい人とみなされた理由の一つかもしれない。熱帯植物研究所には7,000人が働いているということだが一つの研究所しかも一個所に7,000人もの人が勤務している情景はとても想像できない。研究所まではこの入口から3.5kmもあるということだから実験用の植物園の広さだけでも途方もなく広いことだろう。その研究所の施設や設備を一目でも見たいものだがこの旅行が有色金属工業総公司に関係しているだけに農林関係の施設を見せてもらうには手続だけでもかなりの時間が必要だろう。従業員7,000人が1個所で働く研究所付属の植物園の広さと栽培されている植物の種類等々いろいろと想像はしてみたが結局全体のた

たずまいについて納得のゆく想像をするに至らなかった。もっともかりに心よく見学させてもらえたとしても植物に全くうとい人間にとっては大した役には立たないかもしれない。

11時40分目的地の石碌鉱山に到着した。自動車のメーターは出発してから120km走ったことを示している。町の様子は前に訪ずれた時と余り変ってはいないようだがそれでもどことなく活気があるように感じられる。前回泊った招待所は職員用の宿舎になっており道路の反対側に一まわり大きな招待所が完成していた。出迎えてくれた林さんはこの両方の建物のいわば支配人らしい。このような招待所は別に2箇所あるということだ。

シャワーで汗を流し慌だしく昼食を終えた後早速鉱山の概況説明がはじまった。前は鉱山概況や地質鉱床の説明と討論に終始したような感じであったが今回の説明はこれとはやや異っているように思えた。石碌の人口が約4万人であることや鉱山従業員が約1万4,000人であること地質鉱床生産量探鉱状況などは前回とほぼ同様であるが今回の概況説明には鉱山所有の各種工場の数や設備や能力教育施設や生徒数従業員社宅の規模電力や水などの供給能力等環境整備に関する事項がかなり含まれていた。鉱山長が変わったことも万端にわたって説明が行われた理由の一つかもしれないが一般従業員の社宅の面積が1人当たり10m²が標準になっていることなどの説明の真意はよく分らない。もっともこの面積ではやはり狭いので少しづつ広い社宅に造りかえてゆくということである。

夕食後の一時町を歩いてみた。昼間の暑さが信じられないほど夜は快適である。道傍の家でカラーテレビに見入っている家族がいた。どこかで見たような画面だと思ったが日本製の「一休さん」であった。



写真7 石碌鉱山の新しい招待所の一部 各室に机 椅子 ベッド バストイレがある

夕食後の一時 カラーテレビでくつろぐ家族の姿を見て ふと 5年前にくらべてこの鉱山の従業員の生活によりゆとりができてきたのだらうと思った。前に訪ずれた時には むし暑い夜の目抜き通りを歩いてみたが 商店にも 鉱山従業員の家にも カラーテレビがあるという話は聞かなかつたし 道路に面する家にもカラーテレビを見ている人達を見かけたことはなかった。もっとも 通りすがりの他国の人の目の届かない家でカラーテレビを楽しんでいる人達は5年前にも居たのかもしれないが 今夜のこの小さな一つの発見は 従業員住宅をより広いものに造りかえるということとともに やはりこの鉱山の経営が上向きであることを示している例であると受け止めてもよさそうである。

説明を聞き 露天掘や坑内を見せてもらいうちに 石碌鉱山の滞在日数は思いがけなく早く過ぎてしまった。鉱山に別れを告げる前日の夜は 恐らく林さんの心づくしであろう 数々の料理がテーブルに並べられた。

海南島の人でもめったに口にできないという野生動物の肉は 1カ月ぐらい前から頼んでおいてくれたものらしい。その動物の名は分らず また 最高に美味いというものではなかったが 珍味を遠来の客のために料理してくれたその心づかいは嬉しい。ふだんはほとんど飲めないくせに この夜は4~5杯の酒を飲みほした。何故に盃を重ねたかは分らないが 空港に出迎え 坑内にも一緒に入り毎日全く違う食事を準備してくれるなど こまごまと気をつけてくれた林さんの招待所の責任者としての仕事ぶりに感激したのか または 最後の夜の食事の席に白いブラウスに水色のスカート姿で現われた林さんの美しさに魅せられたのかのどちらかだろう。

天涯への道

鉱山に別れを告げる日の朝 打ち合せ通り6時に起き 6時半に朝食を済ませ 8時に出発することになった。「2度あることは3度ある」というが もう1度この鉱山を訪ずれる機会があるのだろうか。林さん御夫妻と 小学校1年生だという子供さんの幸福を祈りながら招待所を出た。玄関にはマイクロバスが待っていた。これから海口まではじめての南海岸沿いの道路を走るので 2日はかかる。招待所の人達が横に一列に並んでお辞儀をしてくれた。林さんは今朝は紺色のスラックスをはいている。当方は中国語が分らず 閩さんの通訳で林さんにお礼の言葉を述べた。閩さんにはここにこしながら 「林さんは海口までお伴します」と言った。客人を出迎え そして 最後まで見送るのが招待所の責任者としての務めということになっているのかもしれないが それにしても大変なことだ。

鉱山を出発してから1時間の後 61km 離れた八所港に到着した。鉱山を離れるとこの港までの間は殆んど真平らである。人口約2万人のこの町は 石碌鉱山の鉱石の船積みと物資の輸送のために造られた港をもってはいるが 水深が浅いため 1万8,000t ぐらいまでの船しか接岸できないらしい。海はなぎ むしろのどかな港といった感じだが 八所港務管理局の人の話では 1年に100日ぐらいは天候が悪いため荷役作業ができないということだ。日本からの定期船はなく 自動車などを積んだ貨物船がたまに入港するらしい。海に面したこの町は 海南島全体が亜熱帯圏内にあることからみて 年間を通じて高温多湿だらうと想像していたが この想像は全くはずれた。真夏には40°C ぐらいになることはあるそうだが 冬には6~8°C に下ることもあるらしい。海南鉄鉱の鉱石は 山元からここまで鉄道で運ばれ ここで船積みされる 鞍山 武漢 上海 宝山などの製鉄所へ輸送されているということである。

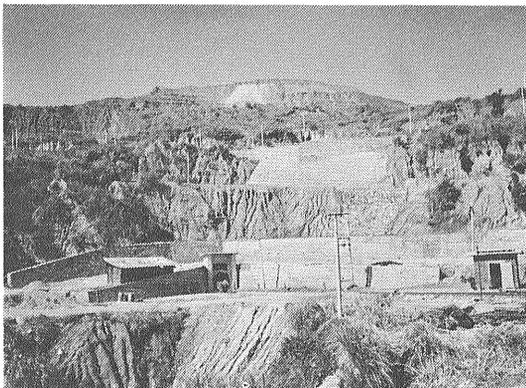


写真8 石碌鉱山の露天採掘場(上方)とコバルト鉱床開発のための新しい坑道(中央やや左下)

八所港を出発して およそ1時間20分の後 鶯歌海に到着した。美しい名のこの村は塩田があることで有名である。鉱山を出発する以前に頼んであったらしく招待所には 既に 昼食が出来上っていた。旅の途中 小さな村の招待所の昼食にはどのような料理が出るのか 場所によって異なることは当然だが 参考のため この招待所の昼食のメニューを列記すると 野菜スープ 鶏肉のイタメたもの エビ(2種類)の茹でたもの(塩味) トーフ煮付け ツミイレ 鰯の煮もの オムレツ 牛肉と野菜のイタメたもの バナナのフライ 白飯の11種類であった。日本のビジネス街の中華料理店の昼食(多

くは1品)の代金で計算すると 一体 いくらぐらいになるのだろうか。ちなみに エビや魚は取りたての新鮮なものである。

この村が誇る大塩田を見る機会もなく 昼食を終えて直ちに出発する。じりじりと照りつける太陽の光にはまだ新しい自動車のエアコンディショナーも いささか根負けしているらしい。舗装がとぎれる度に 物凄い砂埃が巻き上がるが それも長くは続かない。かつては流刑の地であったこの島全体を開発しようということも考えられているそうだから 道路事情等は 少しづつよくなっているのだろう。広州からの飛行機が海口空港に着陸しなかったのも この島の開発と直接に関係しているのかもしれない。従来は小型機しか利用していなかった海口空港は ジャンボ機の使用が可能な滑走路の整備や空港ビルの建てかえで 当分の間は使用できないらしいが 1984年12月にはこれらが完成し 香港からの直行便も運行されるようになるということである。海南島の開発については いろいろの面で検討されているのかもしれないが 海口と香港との間に大型機が飛ぶという話を聞くと 香港の中国への帰属ということを含めて 先ず 観光資源の開発ということが想われる。海沿いの道路を走っているはずなのに 海が殆んど見えない。これまで左手に見えていた峻しい山がいつの間にか丸味をおびた山に変わっていた。誰の目にも分る花崗岩の山である。道路は鉄道と平行して走り やがて やるやかな登り坂となり その坂を登りきった前方には素晴らしい景観が開けてきた。女性的な優しい姿の岩山と深い緑 その緑が尽きた所にはまぶしいほどの白砂が延々と続き そこには青い海原から押し寄せる波がたわむれていた。海岸に巨大な花崗岩がころがっている。砲弾のような形をした一番大きな花崗岩には「天涯」と真紅で刻まれている。遠い昔 大臣の地位にありながら罪人としてこの島に流された蘇軾(蘇東坡)は この島の荒涼とした風景を見つめて 「天涯海角」と嘆息したということだが 今は 風光明媚な行楽地として遊客の絶えることはない。海南島での罪人としての苦しさからようやく放免された蘇軾は 生まれ故郷への旅の途中病死した。それから884年 この島は 様々な人生模様を見つめつつ 少しづつ変わっていった。浜辺の巨

石に刻まれた「天涯」と駅名になっている「天涯」はともに 蘇軾の嘆息まじりの言葉を伝えているのであろう。

ほんの一時の波とのたわむれに 思わず 「うるわしき桜貝一つ 去り行ける君に捧げん……」と口ずさんでいた。通訳の閩さんに請われるままに とうとう最後まで歌った。閩さんの目が少しうるんでいる。多分 遠く離れている婚約者を想い出したのだろう。それから閩さんはせっせと貝殻を拾いはじめた。灼熱の太陽の下 真白の砂浜に押し寄せる波にたわむれる人に混って せっせと貝殻を拾う閩さんの姿が一きわ美しく見える。遠く離れた所に林さんの姿が見える。林さんも貝殻を拾っているらしいが 子供さんへのお土産にするつもりなのかもしれない。

暑い最中の自動車旅行の途中に立ち寄った天涯の浜の澄みきった水面を見つめながら 観光開発とこの美しい浜とが確かに共存できる手だては完璧だろうか とつい老婆心を感じた。

陽はまだ高い。今日の宿泊地は天涯の浜からほど近い山頂にある。広大な椰子園の中にあるというその宿は 一体 どのような造りなのか。いわくありげな山頂の宿 そして その山頂から見下ろす風景 海南島で最も美しいといわれるこの地に泊れるとは予想もなかっただけに このルートを選んでくれた人達の好意が身にしみる。

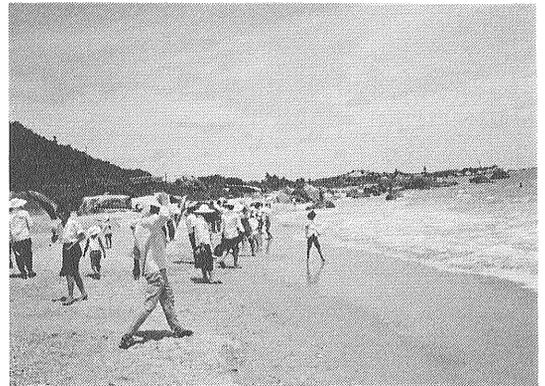


写真9 海南島の南海岸にある「天涯」の浜
左側の山と海岸の露岩は燕山期の花崗岩